

# 阿部次郎『三太郎の日記』における教養の問題

—— 唐木順三の教養派批判の再検討 ——

教育学コース 小室弘毅

The concept of cultivation in “Santaro’s Diary” by Jiro Abe  
— reexamination of the criticism on the “Taisho culturalists” by Junzo Karaki —

Hiroki KOMURO

This paper attempts to reexamine the criticism on the “Taisho culturalists” in “the Attempt to modern history” by Junzo Karaki. Karaki criticises “Santaro’s Diary” by Jiro Abe for its dilettantism. I divide the ideology of the culturalism into the concept of the cultivation in the “Taisho culturalists” and in the next generation. I attempt to prove that Karaki really attempted to criticise not the concept of the cultivation in the “Taisho culturalists” but in the next generation. For that, I classify the cultivation into “the cultivation as lived” and “the cultivation as written”. “The cultivation as lived” is the self-cultivation. “The cultivation as written” is the view of cultivation and the result of “the cultivation as lived”. I attempt to examine how “the cultivation as written” is read.

## 目次

### 問題の所在

- 1 「生きられた教養」と「書かれた教養」
  - A 三太郎という問題
  - B 日記という問題
  - C 読者の問題
- 2 唐木順三の教養派批判と『三太郎の日記』
  - A 「読むことによる教養」
  - B 「自ら生きる」
  - C 阿部の読みの問題と唐木の読みの問題
- 3 教養における読みの問題
  - A 読みの変質
  - B 『三太郎の日記』の「期待の地平」の変化
  - C 精神的貴族主義批判

### 結語

### 問題の所在

現在教養の衰退が叫ばれて久しい。日本において教養と呼ばれるものの原形を造ったのは、阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆、和辻哲郎ら大正期教養派である。これら

の人々を「大正期教養派」として否定的に論じたのが唐木順三の「現代史への試み」であった。その中で、阿部次郎の『三太郎の日記』は「教養派の一見本」として批判されている。唐木の作ったこの評価の大枠は未だ本質的検討がなされず、今に至っている。教養派は本当に否定されるべきものだったのだろうか。

本稿は、唐木順三が「現代史への試み」で提出した批判を軸にして阿部次郎の『三太郎の日記』を再検討し、大正期教養派の意義、教養の問題の見直しを図り、あわせて唐木順三に枠付けられた大正期教養派批判を再検討しようとするものである。

### 1 「生きられた教養」と「書かれた教養」

大正期教養派の教養を考えるために、ここでは教養を大きく二つに分けて考えることにする。それは「生きられた教養」と「書かれた教養」という概念である<sup>1)</sup>。ここではこれらの教養をキーワードとして具体的に阿部次郎の『三太郎の日記』を中心にして見ていくことにする。まず「生きられた教養」であるが、これは具体的に言えば、『三太郎の日記』を著した阿部次郎自身のライフストーリーがそれに当たる。そして、この「生きられた教養」には、阿部自身のライフストーリーである自己形成

としての教養と同時に、その結果として獲得されたもの、阿部が体現したものとしての教養も含めることにする<sup>2)</sup>。またここで、「書かれた教養」というのは、自己形成の記録としての『三太郎の日記』を指す。

なぜここで『三太郎の日記』を取り上げるのかといえば、それは、第一に『三太郎の日記』が大正期のベストセラーであり、大正期教養派のあり方を典型的にあらわすものだからである。堀尾輝久は「大正教養主義を代表するものとして阿部次郎とその著書『三太郎の日記』をあげることは、すでに定説だといってよい」としている<sup>3)</sup>。そして第二に、何よりも唐木自身が『現代史への試み』において、「教養派の一見本」としてこの書を取り上げているからである。

### A 三太郎という問題

「生きられた教養」には、「書くことによる教養」と「読むことによる教養」が含まれる。「書くことによる教養」とは、何かを書くことによって自己形成がなされる、その形成過程そのものを意味する。阿部次郎が『三太郎の日記』を書くことによって、彼自身の自己形成がなされていったのがそれである。

R・D・レインは「自己のアイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせる説話（ストーリー）である」と述べている。つまり、自己とは、元々あるものではなく、自分自身に自分とは何者であるかを語ることによって作り出されるものである、ということである。「書くことによる教養」とは、このように、自分とは何者であるかを書くことによって自己を形成していくことを意味している。

ところでこの日記は、なぜ『三太郎の日記』というタイトルなのだろうか。この問いには二つの疑問が含まれる。一つは、なぜ『阿部次郎の日記』ではなく『三太郎の日記』なのか、ということ。もう一つは、なぜ日記なのか、ということ。

阿部は自らの日記からの転用を行ってながら、なぜあえて『三太郎の日記』としたのだろうか。そこには漱石や鷗外に憧れ、小説家を目指した阿部がいたのであろうか。明治45年、最初に発表された「断片」で「三太郎は」という三人称で語られ、そこで『三太郎の日記』の大枠が決められ、以後多くは「余は」「自分は」「僕は」「俺は」といった一人称の日記的文体で語られることになる<sup>4)</sup>。「断片」において阿部はこれは『阿部次郎の日記』ではなく『三太郎の日記』であると宣言する。そうすることで、後に続く文章の一人称主語はすべて三太郎を指すことになる。こうすることによって阿部自身は筆者で

はあるが、日記そのものからは一步退いた位置に自分を置くことができるようになる。「断片」において日記を書き始める場面で、阿部はこう書く。

「日記の上をサラサラと走るペンの後から、『嘘つけ、嘘つけ』という囁きが雀を追う鷹のように羽音をさせて追いかけてくるのを覚えた。」<sup>5)</sup>

書くそばから自分が自分でなくなる感覚。書かれたものと書きたかったものとの乖離。そういった気持ちになんとか折り合いをつけ、作品とするために阿部は『三太郎の日記』としたのではないだろうか。

また「影の人」で阿部は、三太郎の本名を瀬川菊之丞であるとしている。そして正しく厳粛な生活を意味していたその名前が段々お荷物になり、自分自身の生活が空しく貧しいものになってしまったため、三太郎となったという。それを阿部は、「広い世間を食い詰めた無頼漢が、河岸を変えて新しいまじめな生活を始めるために偽名している」のだという。(sn, 72)そして「人生と抽象」において阿部は、「余は他人に煩わされずして静かに自己の生活を経営することを欲するがゆえに、自己の生活を公衆の前に隠す抽象的言語を愛する」(sn, 34)と述べている。この二つを合わせて考えてみると、阿部には三太郎という存在を前面に押し出すことで阿部次郎個人が一步後ろに下がることができ、筆が進みやすくなるという意識があったと考えられる。それと同時に「僕はまだまだ自分の生活の底を見せるに臆病過ぎる。僕はもっともっと自分の生活を露出する勇気を養わなければならない。(中略)僕はいっさいの衣を脱いで裸になりたい。そうして首をのべて運命と世間との審判を待ちたい。生きるために。復活するために。人となるために。」(sn, 259)とも語り、「できるだけ自分の心の中の生活の底を見せる」(sn, 251)自己告白を望む思いもあった。三太郎とはその相反する気持ちを表現するための形式であったのであろう。

ではなぜ三太郎という名なのか。『三太郎の日記』が出版されるとすぐに阿部は漱石に贈っている。漱石は礼を述べながら、以下のように手紙に書いてきている。

「拜啓 三太郎日記御寵贈にあづかり難有御礼申上候  
あの『三太郎日記』といふ名は小生の好まぬものに  
候中味は読んだのと読まないのとありいづれ拜見致す  
心得に候 御 礼迄 勿々」<sup>6)</sup>

『三太郎の日記』の「三太郎」という名は、漱石の気に入らないものであった。内容が高級なのに比して、タイトルが人を馬鹿にしているというのである。また、阿部の友人たちにも、『三太郎の日記』というタイトルは不評であった。漱石の小説にすでに『三四郎』というも

のがあったからかもしれない。阿部は上の漱石の手紙に対して返事を送り、礼を述べた後次のように書いている。

「三太郎の日記と云ふ題に賛成してくれたのは今迄唯本屋だけで多くの友人はみないけないけないと申しますが当人にはまだ何処が悪いのだから本当にのみ込めません。多分私の現在の人格的のくさみをシンボライズしてある名なので、私の人格が一段高いところのぼらなければ、当人にはわからないのだらうと存じます。」<sup>8)</sup>

漱石の言葉を阿部は随分と気にしているようである。そして「三太郎」を自分の「現在の人格的のくさみをシンボライズしてある名」だとして、その名にこだわっている。三太郎の名字は青田であり、青田三太郎とは、大馬鹿三太郎、あるいは阿呆の三太郎に通ずるものである。つまり、自分を馬鹿で、どこにでもいる平凡な弱者であるとする思いをそのままではなく阿部らしく少しユーモラスにしたのが、「三太郎」という名前である。ここにこだわるところに阿部の性格の一つがあらわれている。

## B 日記という問題

もう一つの問題、それはなぜ「日記」という形式で書かれなければならなかったのか。一つには自然主義の影響があると思われる。唐木は、教養主義は自然主義の後を受けて出てきた広い意味でのヒューマニズムに含まれるとしているが、そう考えると『三太郎の日記』に自然主義の何らかの影響があると考えるのは自然である。また、告白を重んずる当時の風潮もある。告白型の宗教的自伝である内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』は明治28年に刊行された。阿部は内村に影響を受けており、一高時代日課として聖書を講読していたからこれを読んでいただろう。またルソーの『告白』に影響されたという島崎藤村の『破戒』は、明治39年に出されており、『三太郎の日記』にはこういった告白的傾向が影響していたと考えられる。

もう一つ日記を書くことの意味がある。三太郎は「とりとめのないこのころの心持をせめては野の細かな洋紙の上に写し出して、半ばは製造し半ばは解剖して見たならば、少しは世界がはっきりしてきはしまいか」(sn, 15) と思い、日記を付け始めている。日記は自己を対象化する表現として自らの考え、思想を最も表現しやすい手段だった。「書くことによる教養」の「書く」という行為は、告白という意味合いが強い。そして、この行為は『三太郎の日記』における内省主義とつながっている。

『三太郎の日記』は内省主義と特徴づけられるが、内省しながら書くことによって、自己を対象化することができるのが「日記」という形態である。

リースマンによれば、内部指向的人間にとって日記を書くことは重要な意味があった。

「日記を付けるという習慣はこの新しい性格類型の一つの反映として重要なものであるが、それは、いかなれば自分の内面生活についての時間動作研究のごときのものであろう。そこでは個人はその日、その日の自分の行為を記録し、それに判定を下すのである。それはまさしく行動とその行動についての自分自身の検査とが分離されている証拠である。」<sup>9)</sup>

このように、精神的な内省の記述として日記をつけることによって、内部指向的な性格は形成されてゆく<sup>10)</sup>。

自らの内省により自己が造られていく。『三太郎の日記』において阿部は過酷なまでに自己の内面を見つめている。

「内省は自己の長所を示すと共にまたその短所を示す。内省は自己のちからを示すと共にまたその弱小と矛盾と醜汚とを示す。内省の眼は、いやしくもそれが真実であるかぎり、いかなる暗黒と空洞の前にも回避することを許さない。ゆえに内省は時として我らを悲観と絶望と、猛烈なる自己嫌悪とに駆る。」(sn, 113-4)

阿部は、内省によって真摯に自己の暗黒を見、その醜さを嘆く誠実さによって、そこから抜け出ようとする。そこには、単に内省主義というだけでは済まされない、人生への態度があらわれている。その姿に読者はうたれ、憧れ、そして自分自身を振り返り、自らの内省の浅さを知り、阿部のように真摯に自分の人生に直面しようとする。『三太郎の日記』のような内省の日記を付ける者もいるかもしれない。このように『三太郎の日記』は、読者を自己形成へと導いていく。書くということにより自己が形成されていくということを充分理解していたからこそ、阿部はこの作品を「日記」としたのではないだろうか。

## C 読者の問題

ところで、『三太郎の日記』は誰を読者として想定していたのだろうか。教養主義ということで思い起こされるもう一つの、河合榮治郎の「学生叢書」に関していえばその答えは明白である。それは学生である。

では『三太郎の日記』は誰に向けて書かれたのか。学生に対してでないとするれば誰に。自分自身にか。もちろん阿部は発表を前提として書いてはいるが、誰かに何か

を伝えるというよりも、自分の思索の結果を公表する、といった意識が強かったのではないか。だからこそ阿部は、この作品のタイトルを「日記」としたのではないだろうか。

阿部は『三太郎の日記』の中で、以下のように自問自答している。

「B 君は文章を書くときに、読者の顔を明瞭に思い浮かべたことがあるか。

A 思い浮かべようとしたことはあるが、はっきり思い浮かべることができなかった。さまざまなもやもやしたものが僕の面前に立ちはだかつて、僕を羞かませたり躊躇させたりすることはあっても、底をたたけば僕はただ僕自身を相手にして自分の文章を書いているのだ。そうして自分自身に通ればそれで満足しているのだ。僕が割合に大胆に無邪気に自分の生活の底を割って見せることができるのは、一つはこういう製作の心理に基づいているのだろう。もしはっきり読者の顔を思い浮かべることができたら、僕は今よりもっと臆病に小胆になっていたかも知れない。僕は結局読者の顔をはっきり思い浮かべることができないことを仕合わせに思う。」(sn, 255)

また「自序」においても、これらの文章を「内面的衝動の充実を待って始めて筆を執った」とし、「この小さい経験の報告が、それぞれの道を進みつつある現代の諸友に、多少なりとも参考になるようにと切望している」(sn, 14)と書いている。このことから、まず自分自身に向けて書かれ、それが結果として作品になったと考えることができる。つまり、『三太郎の日記』は「生きられた教養」の記録なのである。

このように『三太郎の日記』が「書くことによる教養」の結果として表されたものであるとすれば、「書かれた教養」は、さらに二つに分けて考えることができる。一つは、『三太郎の日記』のように「書くことによる教養」の結果として生まれた作品。これは、主に書き手自身に向かって書かれたもので、書くことそれ自体に意味があったものである<sup>11)</sup>。もう一つは、いわゆる教養論である。それは、教養とはいかなるものかについて書かれたものであり、読者やその対象が明確に想定されているのである<sup>12)</sup>。

この二つの違いは、『三太郎の日記』と「学生叢書」とが、その読者に与える影響の違いを比べてみるとわかりやすい。『三太郎の日記』は、書き手自身の自己形成の過程を、リアルタイムで綴ったものである。一方の「学生叢書」は、人生の先輩からの立場で教養とはこういうものである、と書かれたものである。自分と同年代の人間

が真摯に人生に取り組む過程そのものを読むのと、高所から教養とはこうすべきであると指針を示されたものを読むのでは、読み手の受け止め方、その教養に対する姿勢も違ってくる。これは教養が、持つ者と持たざる者との対比で語られることと、自己形成という意味を合わせ持ち、共に歩む者として、先行者と後行者という関係の中で自己形成をしていくという形で語られることとの違いである。『三太郎の日記』にはまさしく後者の意識が見られる。教養を結果としてではなく、自己形成の過程として捉えた時、そこには持つ者から持たざる者へと語られる権力的関係ではなく、共に同じ道を歩む者としての関係があらわれてくる。つまり『三太郎の日記』が学生に対して持つ意味と「学生叢書」が学生に対して持つ意味とでは、そのあり方が全く異なるのである。「学生叢書」は、いわば学生生活のマニュアルとして受け入れられたのであり、『三太郎の日記』は、読み手である学生がそれとアイデンティファイする形で受け入れられたのである。

この二つの受け止め方がその読者に与える影響の違いは大きい。なぜなら、「青年は最も多く青年から影響を受け、その言葉によって引き上げられる」からである<sup>13)</sup>。『三太郎の日記』の自己への厳しさは、その読者に衝撃を与えるが、「学生叢書」では結局はマニュアルとしてしか作用しないのである。

## 2 唐木順三の教養派批判と『三太郎の日記』

### A 「読むことによる教養」

「生きられた教養」に含まれる「読むことによる教養」は、唐木が「自己の内面的な中心の確立、自己究明を個人の書物を媒介として果さうといふのである」、「教養派の主傾向は豊富な読書、文学と人生論についての古今東西に渉っての読書と、個性の問題であった」<sup>14)</sup>と述べるように、まさしく教養派の主たるイメージを担うものである。

本を読むということに関して、唐木は、教養派における教養とは「一つの理想、一つの古典を選ぶといふことをせず、古典と通称されてあるさまざまな花から、さまざまな蜜をあつめること」であり、それは「特定の主義主張のエピゴネン」ではなく、「すべてのもののエピゴネンであった」とし、これを称して「まさしく模倣の時代といふべきであらう」と批判する。(gk, 33) また阿部が『三太郎の日記』で言う「ニーチェがトルストイを悪く言ったり、トルストイがニーチェを悪く言ったりすることは、俺がニーチェとトルストイと両方の弟子

であることを妨げない（中略）。凡ての優れた人は自分の師である。如何に多くの人の影響を受けても、総合の核が自分である限り、自分の思想は遂に自分自身の思想である。」(gk, 40) という部分を引用して、大正教養主義の「あれもこれも」のディレッタンティズムを批判する。しかし、実は阿部自身そのことの限界を痛切に実感していた。「断片」において阿部は次のように書いている。

「爾来幾多の世界は別々の戸口を通して俺の頭脳の中に侵入してきた。そのあるものは俺の心に作用して従来知らざりし喚起と悲哀とを教えた。そのあるものは俺の理解を強制して瘤のごとく俺の頭の一角に固着した。これらの種々の世界は俺の心の中で、俺の頭の中で、もしくは俺の心と俺の頭とに相對壘して、相互の覇権を争っている。俺の生命は多岐に疲れてようやくその純一を失ってきた。過渡の包摂は俺の心の生命を傷つけた。」(sn, 17)

時代は日露戦争の勝利直後であり、世界の諸文化が、それもあらゆる時代の文化が同時に日本に押し寄せてくる時代において、阿部はそのすべてを受け取ろうとした。そして取り込んだそれぞれの思想が阿部の中で互いに矛盾し合い、阿部を混乱させた。もともと論理的な阿部はそれによって自己を失い、その生命を傷つけることになった。

つまり唐木は、当の阿部自身すでに痛切に自覚していたまさにその点を批判したのにすぎない。また、その本の読み方にしても、阿部は決して唐木の言うような「あれもこれも」といった読み方を肯定しているわけではない。先に唐木が引用していた部分、「凡ての優れた人は自分の師である。如何に多くの人の影響を受けても、総合の核が自分である限り、自分の思想は遂に自分自身の思想である」。ここで強調すべきは「総合の核が自分であるかぎり」というところである。自省により自らの弱さを自覚し、そこから発する内部的衝動に従う。それが自分を総合の核とすることであり、そこには深い人格的連続性がある。それがあの上の「あれもこれも」なのである。そして阿部は何よりも「自ら生きる」ことを強調するのである。

## B 「自ら生きる」

『三太郎の日記』の中で、阿部は生活の中心を作り、その中心によって日々の生活を調整する事を勧めている。生活の中心を発見する具体的方法は、師を選び、その師に自己の鍛練を託すことである。しかし現代は、人

と人との精神的信頼が内面的にくずれ、師弟の関係が薄い時代である。そのため「きわめて幸福なる少数の人を除けば、我らが『師』を持つとは一人の人の生涯の著作を通じて、その人の内面的経験に参すること」(sn, 379) とならざるをえない。その場合、何よりも重要なのは、師に、この場合は書物に、自分の生活内容を供給してもらうことではなく、問題の解き方、途の切り拓き方、生活内容の方向を学ぶことである。それゆえ阿部は、生活の中心を求めるために古人の著作を研究する時、その意味は読書にあるのではなく、「我らの内面的知覚を開拓してこれを正しき方向に導いてゆくところにある」のだという。そして次のように言う。

「書を読むとは自ら生きることを停止することを意味するならば、また他人の著作を研究するとは自ら省ることを中断することを意味するならば、我らはもとよりいかなる場合にも、書を読むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。ここに読書といい研究といい、師につくというのは、自ら生き、自ら省るための一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶しておく必要がある。」(sn, 380)

このように阿部は、何よりもまず「自ら生きる」ということを強調する。書の読み方にしても、ただ「あれもこれも」と漁るのではなく、自らの「内部的衝動」に従って、ひとりの人を師と決めて、その人の著作を「自ら生き、自ら省る」ために読めと言うのである。つまり、師の言葉を学ぶのではなく、自己の直接経験を基礎として、師の人生への向い方を学ぶのである。いかに師につこうとも、書によりそれを代替させようとも、自らの足で歩き、自己の心から徹底して生きなければならない、というのである。

## C 阿部の読みの問題と唐木の読みの問題

唐木は「我々は果して個人の書物を繙くといふ方法によって真の内面生活を確立しうるであらうか」(gk, 46-7) と問い、読書による教養の効果を認めながらも、「型」を失ったことを問題にする。そして、本が真に本となり、古典となるのは、現在の緊張した力であり、主体の行為であるという。「古典は過去に転がってゐるものではない。呼びかけと、それに応じて立ち上がるこちら側との緊張に於て始めて成立するものである」(gk, 25) といい、その緊張を可能にするのが「型」、あるいは「型」を形成しようとする意志であるとする。「型の形成の問題は唯一の古典を主体的に樹立することにある」(gk, 55) するのである。

そして「大正期以来の教養思想は寧ろさういふ一つの

古典を選ばないといふところにその本来の特質があり、型を嫌って個性の多彩を好み、批評的であって創造的でないところにその歴史的規定があった」(gk, 55)とするのであるが、果してそうであろうか。

先に確かめたように『三太郎の日記』に見られるのは、自ら徹底して生きることを求め、自己を核として世界へと向おうとする姿勢である。これは唐木のいう主体の行為、型を形成しようとする意志ではないだろうか。自分にとっての唯一の古典を主体的に求めようとする姿勢ではないだろうか。唐木は伝統的な「修養」を「教養」に對置させ、「修養」には儒教的武士道的な人間形成の「型」があったが、「教養」はそれを喪失したと特徴づける。確かに阿部たち教養派は「型」といった外からの強制を嫌った。しかし、教養派が嫌ったのは、「型」そのものではなく、時代に合わなくなり形骸化した「型」であった。四書五経といった唯一の古典だけでは対処しきれなくなったのが大正期教養派の時代で、多量の書物が溢れ、何を讀んでいいのかわからなくなり、旧来の修養的な「型」が崩れてしまったのがこの時代であった。教養派は「教養」という言葉を使うことによって新たな「型」を創造しようとしたのではないだろうか。

その「型」は確かに実践的ではなかったかもしれない。しかし、多量の情報をいかに処理するか、いかに読むのか、といった「型」にはなりえたのではないだろうか。そして、その本を読むという「型」のあり方は、唐木のいう「型」のあり方とそれほど違うものではない。ここに教養派の求めたものと唐木の求めたものは一致を見ることがになる。つまり教養派は、徒に「あれもこれも」と人類の文化遺産を書物によって漁るのではなく、洪水のように押し寄せる文化の波、多量に出版される書物の波に対して、いかにして自分にとっての古典を見つけるのか、そのための「型」を作ろうとしていたと言えるのである。

教養派が作り上げた教養主義は形は変えながらも戦後まで続く。旧制高校におけるマルクス主義の導入も、それは書物からであった<sup>15)</sup>。そう考えるならば、教養派は本を読みながら自己を形成するという「型」を作り上げた、ということになる。とすれば、阿部の「読むことによる教養」における、いかに本を読むかという読みの問題は唐木のそれと重なることになる。

では、唐木は、教養における読みの問題について、その考えが阿部と重なるにもかかわらず、なぜ教養派を批判したのだろうか。別の言い方をすれば唐木は何を批判しようとしたのだろうか。

### 3 教養における読みの問題

#### A 読みの変質

唐木は「読書が黙読、しかも無個性な活字の黙読となり、しかもその場所が公共的ではない書齋となったとき、読むといふことの意味したものが変質してしまったのではないか」(gk, 49)とし、大正期の教養はその変質した読書の上に立っているという。まさしくその通りであろう。しかし、唐木の教養派批判が教養派を批判しているのではないとすると、唐木は読むということの変質において見落としている点があると考えられる。それは、大正期において読むということの意味がもう一度変質したのではないか、ということである。唐木が批判したのは、その後の変質したあとの読書だったのではないか。「あれもこれも」というディレッタンティズムは、教養派の後の変質した読書にこそ当てはまる。

読むことにおける第二の変質は、『三太郎の日記』と「学生叢書」を比べることで明らかになってくる。「学生叢書」は学生、特に旧制高等学校生を、主な読者に想定している。これは先に述べたように、「生きられた教養」の結果としての作品となった『三太郎の日記』と大きく違う点である。「学生叢書」を編集した河合栄治郎も、阿部と同様に教養とはディレッタント的に文化を消費することではなく、人格の形成であることを主張してはいる。例えば、「教養とは或は書物を漁り或は美術品を眺め廻ることではない、教養とは正に最高善への努力を云うので、その最も深き意味よりして、始めて知識や芸術が意義付けられてくるのである」という。その最高善とは「人格を全き程度にまで自我に実現せしむることであり、之を別な方面から云えば、自我を成長発展せしめて人格を実現せしめることである」<sup>16)</sup>。これで見ると、河合も、教養を古今東西の文化を「あれもこれも」と漁ることであると考えていたわけではなく、むしろ「一面に於て軽率なる実践を警めて深き内面的思索へと志し、他面に於てあれもこれと漁るデカダンの教養を排して、深き思索に源した堅実剛毅な実践をと目指し」<sup>17)</sup>ていたことがわかる。実際、教養が文化の消費に終始してしまわないように、「学生叢書」全体としては学問や芸術鑑賞における基本的態度や方法、執筆者の学生時代の回顧録などを載せることで、教養が結果としての文化の具体的内容だけでなく、それへ至る形成過程としての生活態度であり方法であることを示そうとしているのである。

しかし、そうは言っても、「学生叢書」の構造、内容が読者に与える印象は、教養とは結果であり、文化の消費である、といったものだっただろう。河合がいかに「学

生叢書」の自身の教養論の中で、教養とは人格を形成する過程であると強調しようとも。

「学生叢書」の構成を見てみると、それぞれの分野における基礎知識や学生の望ましい生活態度、方針、執筆者たちの学生時代の回顧などがその主な内容となっている。第一巻『学生と教養』は1936年に出され、これが基となって、以下の巻はこの巻の内容をそれぞれ分化発展させる形で書かれている。以下『学生と生活』、『学生と先哲』、『学生と社会』、『学生と読書』、『学生と学園』までの前半の六巻は、主に学生がいかに生きるべきか、生活すべきかということに対する助言に重点が置かれ、一方、『学生と科学』、『学生と歴史』、『学生と日本』、『学生と芸術』、『学生と西洋』、『学生と哲学』とタイトルを見ても分かるように、後半の六巻は学問や芸術、哲学などの分野における概説書的な内容となっている。つまり、前半は、学生の生活態度の指針を示したマニュアルであり、後半は、非常に広範囲に涉った網羅的な教科書的な内容となっていて、これを見ると、教養とは幅広い知識の享受である、という印象を受けるものとなってしまっている。また、1943年に「学生叢書」の「外篇」として出された『教養文献解説』では、「教養の目的の為に必要と思われる文献」<sup>18</sup>がリストアップされ、解説されている。これは必読文献案内とその内容解説で、こういうものが出されたことから、当時すでに学生たちの間では、教養とは多くの本を読み、その内容を知っていることだという考えが広まっていたと推察される。そういった考えの下、学生たちは、自己形成の指針ではなく、教養を手軽に身に付けられる便利本を「期待」していたのだろう。中野孝次は、中学に進学する前の独学時代に、「そのころ学生のあいだに人気のあったものに、河合栄治郎編の『学生と読書』『学生と生活』といった叢書があり、巻末に学生必読書目がのっていたが、それが僕の読書案内になった。小遣いをもらおうと神田の古本屋街にいて、少しずつそれらを買って来てはむさぼり読んだ」<sup>19</sup>と言っている。「学生叢書」は、このような利用のされ方をしていたのである。

## B 『三太郎の日記』の「期待の地平」の変化

それでは、出た当時、『三太郎の日記』はどのように読まれることを「期待」<sup>20</sup>されていたのだろうか。その広告文を和辻哲郎は、以下のように書いている。

『三太郎の日記』は阿部君の内生が底力強く成長して行った記録である。阿部君は此記録を造る時に、内に渦く者燃え上る者を鋭く分析することが出来た。此表現の能力と深い本質的な内生とは真正の哲学の根本

条件である。『三太郎の日記』を心読する人は、そこに偉大なる哲人の力強い芽生が、一刻々として伸び行く偉大なる芽生が、閃光的にしてしかも形式の厳整な、陰影濃やかにしてしかも線の太く強い、驚くべく立派な形に現はれてゐるのをみるだらう。三太郎は過酷に見ゆるほど自己に誠実である。三太郎の言説の力強いリズムは、三太郎が自ら知らうとはしないその偉大な運命から湧いて出る。彼と共に心の渾沌を切り開き、彼と共に苦しみ怒り歎ぶのは、やがて人性の深みへの突入である。(著者の友人の一人)<sup>21</sup>

これを見ると分かるように、『三太郎の日記』は、読み手が三太郎と共に生き、苦しむことを「期待」されているのである。また、大正7年に書かれた「合本三太郎の日記の後に」という文章には「三太郎の日記は内生の記録であって哲学の書ではない」とも書かれている。つまり、自己内生の心の記録であって、思想の表明ではない、と言うのである。

その後の時代、昭和初期においてはどのように読まれることが「期待」されたのだろうか。河合栄治郎の『第一学生生活』(昭和10年)における読書リストで、『三太郎の日記』は、『人格主義』と共に「伝記」「文学」「随筆紀行」ではなく、「思想」という項目に分類されている。他に「思想」という項目に分類されているものに、パスカル『パンセ』、ルソー『告白』、『エミール』、カーライル『衣装哲学』などがある。ここから『三太郎の日記』は思想書の一つとして読まれるようになっていたことがわかる。さらに、時代を下るにつれて、それが遂には『三太郎の日記』を読んでいること自体が「教養がある」ということになっていくのである。

つまり『三太郎の日記』が出た当時と「学生叢書」が出て以降とは、徐々にその読まれ方は変化していったのである。この読まれ方の変化は、教養が自己形成の過程としての形成的概念から結果としての知識の概念に変容する過程を如実に伝えている。『教養文献解説』といった、教養書といわれる本のダイジェスト版を「期待」する学生にとって、『三太郎の日記』も単なる教養書の一冊にすぎなくなったのであろう。

このような教養書一般を読むことでよしとするような読み、これこそが、まさに唐木の批判した教養主義的読み、「あれもこれも」のディレッタンティズムである。唐木が批判した読みは、教養派のそれよりも、教養派が原形を形作り、その後変質していった教養主義のそれにこそ当てはまる。これは区別して言えば、「教養主義」ではなく「教養書主義」とでも言うべきであろう。唐木は後の時代の「教養書主義」を批判したのだが、それを教養

派と同一視することで教養派批判をしてしまったのである。つまり、唐木は、自分自身が批判した「教養書主義」的な読みの地平に立って、『三太郎の日記』を読み、阿部と教養派を批判したのである。

教養とは、阿部においては人格主義へとつながるものであった。そこに至るための読書であり、それは何よりも「自ら生きる」ための形成的なものであった。それが「教養を得る」という知識習得的なものに自己目的化され、教養のもつ本来の意味内容は変質してしまった。教養のもつプロセス的意味が喪失したのである。その時もはや教養は、自己形成の過程ではなく、結果として得られたものとしての意味しかもたなくなり、知識という言葉とほとんど同じように用いられるようになってしまっているのである<sup>22)</sup>。

### C 精神的貴族主義批判

このような『教養文献解説』を「期待」するような読み方で『三太郎の日記』を読む時、そこにはエリート意識が見られることになる。

「俺は偉くもなく強くもない事実を恥とする、併し決して此自覚を恥としない。俺は偉くも強くもないが、俺の周囲に蠢く張三李四に比べて確かに一步を進めている。」(sn, 130)

「決定した態度を以て人生の途を進んで行く人の姿ほど勇ましくも亦羨ましいものはない。此等の人の日に輝く凛々しさに比べれば、僕などは唯指を咥へて陰に潜むより仕方がない。併し汝等は何故に愚図愚図するぞと叱る人の姿を見る時その人の長き影には強制と作為と威嚇と附景気と、更に矯飾偽善の色さへ加はつてゐるのは如何したものであらう。彼等に比べれば僕等は丸で品等を異にする上品の人である。彼等は偽人である、僕等は真人である。(中略)僕は自分のつまらない者であることを忘れたくない。併し自分のつまらないことさへ知らぬ者に比べれば僕等は何と云ふ幸な日の下に生まれたことであらう。此差はソクラテスと愚人との差である。此等を誇としないで、又何を誇としようぞ。」(sn, 38)

唐木はこれを引用して「ここに二度使はれてゐる『併し』に注意しよう。『併し』以前の自己卑下は、『併し』以後の自己優越を意識し計算して書かれてゐる。傲慢ともいひたい内在的充足がここにある」(gk, 39)とコメントする。また、上山春平は同じ箇所を引用して、これを『三太郎の日記』を貫く「弱者の哲学」であるとす。「自らを弱者としてみとめながら、弱さを知るがゆえに、弱さを知らないにせの強者に優越する」<sup>23)</sup>という知的

エリートとしての自負をあからさまに前提とした自己規定であるというのである。つまり、唐木と同様に自己を弱者とする認識はエリート意識を前提とした、阿部の一種の反語にすぎないというのである。

確かにそう読む事ができるであろう。しかし、これも後の世代における「教養書主義的」な地平に立った読みではないのだろうか。阿部の意識において、力点はどこにあったのか。自己優越、エリート意識を前提とした上での「弱者の哲学」であったのか。阿部は、「力量を見るのではなく人間としてみるようになってきた」と書いているが、こういった意識は『三太郎の日記』にいくつか見られる。これは弱者に、そして人間に力点をおいた、すべての人を同胞と見る、「共に歩む者」という意識である。つまりこれは、名詞としての「教養」が持つ結果として意味、つまりは「教養がある／ない」という形で語られるような、持つ者と持たざる者という対比ではなく、ドイツ語のBildungが「教養」という意味を持つと同時に「自己形成」という意味を持つように、同じ人間としての道を行く先行者と後行者という関係になる意識である。

阿部は人間を、「与えられたるものを実現する労苦と誠実とを標準として」評価し、意志の誠とその価値基準を置く。そうすると「天分の大なる者と小なる者と、強い者と弱い者とは、すべて試練の一生における同胞となる」(sn, 2)という。阿部には、自分は天才ではないが、天才と同じ「人間」の道歩いているという意識がある。天才を崇敬すると同時に、誠実なる凡人を尊敬する。自らを「弱小にして誠実な者の見方」であり、逆に「驕慢にして天才を銜う者の敵」であるとす。そういった意味で阿部が否定するのは、徒に自らが偉大であることを叫び、他人を軽蔑したり嘲笑したりすることを自慢にしている者たちである。つまり阿部は、天才から凡人、弱者まで、すべての人を同胞として見、同じ道を「共に歩む者」と見ているのである。

では、にもかかわらず、なぜ『三太郎の日記』は、自己優越、エリート意識に裏打ちされた「弱者の哲学」、つまりは精神的貴族主義であるとされたのであろうか。ここには、『三太郎の日記』の読まれ方の問題が関わっている。一つには、『三太郎の日記』が多く旧制高校生に読まれたこと。その時代の彼らの社会的地位から、三太郎と自己を同一視し、そうする事で三太郎の態度が精神的貴族主義に写ることになったのであろう。もう一つは、先に述べたように『三太郎の日記』がその後あらわれた「教養書主義」の地平から読まれたこと。この二つが考えられる。



ここで問題になると思われるのは、先の引用にある「世間」、あるいは「張三李四」の意味内容である。これらの言葉が誰を指しているのかという問題である。この時阿部がその批判の対象としていたのは、単なる世間一般ではなく、共に歩むという意識の反対、持つと持たざるとの対比の上に立ち、自らに対し真摯な内省を欠いた者、それが「張三李四」であった。唐木は『三太郎の日記』から、次の箇所を引用している。

「彼はこの頃になつて漸く世間といふものの存在を真正に意識することが出来るようになって来た。世間とは、すべての真剣な努力に対してまじめな注意と同情と尊敬とを払はぬ者の集団であつた。而もこの集団に属するものは浅薄なる好奇心を以て他人の生活を話題にし、他人の一举手一投足にも是非の評を挟むことを特権と心得てゐるものであつた。彼はノンセンスによつて彼を怒らせる批評家をばこの意味における世間の代表者と見た。」(sn, 238)

この「世間」に対して「如何に余が汝よりも高く、大きく、精緻なるかを見よ」と叫ばずにはいられない三太郎の自己優越を、唐木は批判する。しかし、この文章の後『三太郎の日記』にはこう書かれている。

「これらの文章を書くとき、彼の眼中にあるものはただ彼を嘲罵する世間の批評家のみであつた。(中略)ゆえに彼は一方に世間に対して威張りかえしてやりながら、一方にはこれらの態度が平和にして謙遜な人達をいたずらに脅かすことを、すまないと思ひ、恥ずかしいと思ひ、不安に思つた。」(sn, 238)

これを先の「共に歩む者」の意識と重ねてみると、阿部にあつたのが、エリート意識であつたとは必ずしも言えなくなる。ところが唐木はこの肝心な部分は引用していない。阿部が何を敵としていたかを無視して、徒に精神的貴族主義であると批判することはできないだろう。

『三太郎の日記』はこのように後の「教養書主義」的な読み方により、その当初持っていた意味合いが失われてしまった。そして唐木は、その読みの上に立って阿部たち教養派を批判したのである。

## 結 語

以上見てきたことから明らかなように、『三太郎の日記』における阿部の考える教養のあり方と、唐木のいう本来の教養のあり方とは別のものではなかつた。唐木が批判したのは、実は大正期教養派ではなく、その後に変質した「教養書主義」であつた。唐木の教養派理解は「教養書主義」的な読み傾向に傾斜しており、それと教養派

とを同一視することで教養派を批判したという印象を拭き切れない。つまり唐木は、自らが批判したものの「期待の地平」の読み立って『三太郎の日記』を批判し、教養派を批判してしまったと言える。そこに、唐木の教養派批判の限界があつたと考えられるのである。

本稿では、『三太郎の日記』の読まれ方に沿って唐木順三の大正期教養派批判の限界を探ってみた。ヤウスが『挑発としての文学史』でいう「期待の地平」という概念を導入することで、『三太郎の日記』の読まれ方の変化を明らかにし、唐木は教養派をその変化した読まれ方の上に立って批判したと考えた。ヤウスが扱ったのは集団的「期待の地平」である。旧制高等学校生が『三太郎の日記』を具体的にどのように読んだのか、またその読みがどのように変化したのかは、今後の課題となる。また、教養という概念から、そのプロセスの意味が喪失してゆく経過は、今後丹念に後づけることが必要だろう。

(指導教官 西平直助教授)

## 註

- 1) Bruner, E.M は生を「生きられた生 (life as lived)」「経験された生 (life as experienced)」「語られた生 (life as told)」の3種類に区別する。「生きられた生」とは現実に起こっていることであり、「経験された生」とはその人のイメージ、感覚、感情、欲望、思想、意味から成り立っている。「語られた生」とはその人のライフヒストリーであり、語りの文化的慣習、聞き手、社会的文脈によって影響を受けるものである。(Bruner, E.M 1984 Text, play, and story: the construction and reconstruction of self and society. the American Ethnological Society.)
- 2) ドイツ語のBildungは教養とも訳されるが自己形成とも訳される。Bildungsromanは「教養小説」とも訳されるが「自己形成小説」とも訳される。その訳し方の難しさを柏原兵三は以下のように述べる。「教養というすでに得られた教養を日本語では意味しがちだが、BildungsromanのBildungにはBildungに至る動的な過程が、結果としてのBildungと共に含まれ、その二つは同じような重みをもって意味されている。いや場合によっては前者の方が後者よりも強調されていると言つていい位かもしれない。しかしBildungを教養と訳すと、どうしても結果としてのBildungの意味だけに限定されてしまう。だからBildungに至る動的な過程を強調して訳すとすれば、むしろ自己形成小説とでも訳した方が良さそうであり、実際にその訳語も使われているが、そうすると今度は、自己形成の目標・結果としてのBildungの方が全く訳の中に出てこない。」(柏原兵三「ドイツ教養小説の系譜」しんせい会編集『教養小説の展望を諸相』三修社1977年60頁) 教養主義が批判されるのは主に結果としての教養を重視することによ

- る。結果として得られた教養の観点から見るとそれは持つ者と持たざる者との対比になり、教養主義はエリート主義であるといった批判にさらされることになる。しかし教養を、それを目指した自己形成のプロセスとして捉えれば、そこにはそういった対比はなくなる。そして教養派が目指したものは結果としての教養ではなくプロセスとしての教養ではなかったのだろうか。
- 3) 堀尾輝久『現代教育の思想と構造』岩波書店1971年352頁
  - 4) R・D・レイン『自己と他者』志貴春彦／笠原嘉訳みすず書房1975年110頁
  - 5) ちなみに『三太郎の日記』48篇の内、新聞、雑誌等に発表された当時の原題が「三太郎の日記」或いは「三五郎の日記」となっているものは22篇になる。(佐々木靖章「阿部次郎『三太郎の日記』の構成—資料を中心にして—」『茨城大学教育学部紀要』第24号1974年)
  - 6) 阿部次郎『合本 三太郎の日記』角川書店1968年15頁、以下、この書からの引用は (sn, 15) というように本文に載せる。
  - 7) 大正3年4月9日付阿部次郎宛『夏目漱石全集』第15巻岩波書店1967年342頁
  - 8) 大正3年4月20日夏目金之助宛『阿部次郎全集』第16巻角川書店1963年526-7頁
  - 9) D・リースマン『孤独な群衆』加藤秀俊訳みすず書房1964年36頁
  - 10) またM・フーコーは西欧における個人の成立の最大のきっかけとして告解の普及をみて、次のように述べている。「個人としての人間は、長いこと他の人間達に基準を求め、又他者との絆を顕示することで(家族、忠誠、庇護などの関係がそれだが)自己の存在を確認してきた。ところが彼が自分自身について語り得るか、あるいは語ることを余儀なくされている真実の言説によって、他人が彼を認証することになった。真実の告白は、権力による個人の形成という社会的手続きの核心に登場してきたのである。」(M・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』渡辺守章訳新潮社1986年76頁)
  - 11) ここには弘津正二『ある哲学徒の手記』、原口統三『二十歳のエチュード』、倉田百三『愛と認識の出発』などを例に挙げることができる。また時代は少し異なるが林尹夫『わが命月明に燃ゆ』もここに入る。この書は『三太郎の日記』に通ずる、自己形成の内的記録である。林尹夫の自己形成への姿勢は三太郎の自己形成の姿勢と一致する。そういった意味では『三太郎の日記』の精神を受け継いでいると言えるであろう。
  - 12) 教養論を扱ったものとして渡辺かよ子『近現代日本の教養論』行路社1997年がある。
  - 13) 手塚富雄『一青年の思想の歩み』要書房1951年60頁
  - 14) 唐木順三『新版現代史への試み』筑摩書房1963年23頁、以下、この書からの引用は (gk, 23) と本文に載せることにする。
  - 15) 橋本敏市「近代日本におけるエリート養成の教育課程—旧制高等学校の教養主義教育について—」『東京大学教育学部紀要』第30巻1989年
  - 16) 河合栄治郎「個人成長の問題」『学生と先哲』日本評論社1937年21-22頁
  - 17) 河合栄治郎「序文」『学生と哲学』日本評論社1941年3-4頁
  - 18) 木村健康編『教養文献解説』日本評論社1943年1頁
  - 19) 中野孝次『わが体験的教育論』岩波書店1985年43頁
  - 20) H・R・ヤウス『挑発としての文学史』巒田収訳岩波書店1999年 読者の文学観、理解力、知識によって作品の受け止め方が異なるという作品の受容過程に着目したのが「受容美学」であり、その中心概念が「期待の地平 Erwartungshorizont」である。時代や社会や文化によって異なる「文学とはどのようなものか」という期待に影響を受け、「文学作品は、新刊であっても、情報の真空の中に絶対的に新しいものとして現れるのではなく、あらかじめその公衆を、広告や、公然非公然の信号や、なじみの指標、あるいは暗黙の指示によって、全く一定の受容をするように用意させている」(36頁)のである。
  - 21) 「生活と芸術」第1巻第8号大正3年4月「アララギ」第7巻第5号大正3年6月
  - 22) この教養の過程の意味から結果としての意味への変質は、かつては「教養する」という動詞でも使われていた教養が名詞のみで使われるようになったこととパラレルのように思われる。自己形成の過程とその結果獲得された教養という二つの意味を合わせ持つBildungの意味を「教養する」という動詞で使うことによってかろうじて保っていた日本語の教養は動詞から名詞になることによってそのプロセスの意味とその言葉の持つダイナミズムを失うことになってしまった。『三太郎の日記』では「教養」と「教養する」の両方が使われ、動詞の方は「自己を教養する」という形で使われている。また三高生であった林尹夫は、その日記にやはり「自己を教養する」と書いている。(林尹夫『わがいのち月明に燃ゆ』ちくま文庫1993年90頁)ただ両者とも「教養」を動詞として使うのはまれであり、名詞として使っていることの方が圧倒的に多い。しかしともかくも「教養」は名詞と動詞の両方で使われていたことは事実であり、そうすることでかろうじて自己形成のプロセスとしての意味とその結果としての意味を合わせ持っていたと考えられる。一方、その用語法を見てみると、「教養」という言葉は明治初期においては「教育」と同義に使われている(進藤咲子『「教養」の語史』『言語生活』1973年10月)そして目的語も「児童ヲ教養スル」「国民を教養せんとする」のように自己以外のものを取っているが、阿部と林のものは共に「自己を教養する」と自己を目的語としている。自己を目的語にとることによって「教養」という語は「教育」の意味から分化していったとも考えられる。
  - 23) 上山春平「阿部次郎の思想史的位置—大正教養主義の検討—」『思想』岩波書店1960年373頁